平成二十九年　六月三〇日発行
三重大学　日本語学文学第二八号　抜刷

翻刻　当世医者風流解二編

吉丸雄哉

翻刻　当世医者風流解二編

吉丸雄哉

凡　例

漢字は現在通行の字体に改めた。常用漢字表にあるものは基本それを用いたが、灯と燈など区別のため旧字体を用いたものある。原文カタカタのうち助詞などひらがなに改めたものがある。反復記号は、漢字の場合は〳〵であっても々に置き換えた。原文の。発話のへは「　」にして最後を閉じた。

書誌情報

当世医者風流解　二編　中本三巻三冊　架蔵本。
表紙　水浅黄色雲英地原表紙　縦十八・三糎横十二・三糎
本文　四周短辺　縦十四・九糎横十・五糎
構成　上巻　二十五丁（序二丁、目録一丁半、挿絵半丁、本文二十一丁）
　　中巻　三十一丁（本文三十一丁）
　　下巻　二十六丁（本文二十五丁、次回予告半丁、奥付半丁）
挿絵　上巻　七カ所（目録裏、二ウ三オ、六ウ、七オ、十ウ十一オ、十六オ、十七ウ）
　　中巻　十二カ所（二ウ、三オ、六ウ、七オ、十二ウ、十三オ、十七ウ、十八オ、二十一ウ、二十二オ、二十七ウ、二十八オ）
　　下巻　九カ所（二ウ、三オ、八ウ、九オ、十四ウ、十五オ、二十ウ、二十一オ、予告半丁）
題簽　原題簽双辺左肩　「當世医者風流解二編　上（〜下）」
　　中巻の題簽欠。津市井田文庫本が「當世医者風流解中」であり、同様と思われる。
目録題　「當世医者風流解二編　惣目録」
序題　「當世醫者風流解二編序」
内題　「當世医者風流解二編」
板心　〇。喉側に丁付あるが通常は見えない。
作者　横谷南海
序文　文政五年一月　横谷南海
画者　未詳
刊記　「文政五年午正月　／作者　横谷南海／京師書肆　河南喜兵衛　美濃屋半兵衛　山田屋五兵衛／大坂書肆　河内屋茂兵衛」

諸本　架蔵本と津市立図書館井田文庫蔵（井田　90　8～10）がともに雲英入りの表紙でどちらも初期の印本と思われる。井田文庫本は架蔵本より縦横ともに三ミリずつ小さく、また上冊の題簽が「當世医者風流解　二編　中」と間違えている。国立国会図書館蔵本が縹色表紙、無刊記、柱に巻数が入っている。国会図書館蔵本は初編・二編とも「万弥」印があり、蓬左文庫蔵本二編にも「万弥」の印があるが、ともに後印本と思われる。国会図書館本は初二編を通して巻ごとに柱刻が一から六になっているので、もともと初編二編あわせて六冊分冊で出したと思われる。現在は編ごとに三巻ずつまとめて一冊ずつにしたのだろう。二編は三冊揃った架蔵本の他に、二編上冊のみの端本も所持している。表紙は若草色でこれも後印本であるが、国会図書館本、蓬左文庫本との先後関係は不明。

解　題

当世医者風流解初編は、親も医者の厚釜敷安という男が医学修業のために田舎から上京し、そのころ人気の気転頓作先生から医道の奥義を習うという内容である。その奥義とはまともな治療の方法ではなく、弁舌により相手の気持ちを巧みに動かしてよい治療だったと思わせるやり方である。中本の会話体という明らかに滑稽本の様式であり序文でも膝栗毛を意識しているが、登場人物同士の会話のやりとりによって展開するのではなく、ほとんど気転頓作先生の一方的な講釈が並べ立てられ、また医療に関係なく、当世人の気質が昔から変化したことを指摘する箇所も多いので、書型ではなく内容を重視すれば、談義本や心学講釈本に似た部分も多い。初編は三巻からなるが、医療の方法を述べるのは中巻で、上巻はほぼすべて、下巻の前半は昔と今との人の気質の違いを述べている。下巻後半では、厚釜敷安が商家の娘を診察し、おはん長右衛門もどきで、妊娠したと見立てて大失敗して、加賀千代女に逆恨みをし、千代女から婦人療治の秘密を伝授される結末を迎える。

江戸時代医学小説では藪医者を描くのが通例で、本作もそのひとつである。下巻は生半可な医者による医療の失敗をおどけたふうに描くという、竹斎以来の伝統的な藪医者小説であるが、本作の主眼は医者が口先で患者の気持ちをいかに操作しているかを暴露した中巻にあるだろう。談義本であれば、医者への批判が主であるが、本作は医者からの患者対策の種あかしである。示される話法がそのまま通用するとは思えないが、なんとなく医者に丸め込まれているとの実感は当時の患者にあって、そこが共感を呼んだのだろう。また、言いように従って納得してしまう人の心を巧みに描いており、普遍的な読み物としていまも古びない。

二編が翌年に刊行されたことや、後刷本や異版本があること

から、よく読まれたと思われる。作者の横谷南海は詳細不明。医者が偽名をつかって書いたのかもしれないが、医者でなくとも執筆可能な内容である。作中の狂歌を詠んでいる四穂園金英、南陽館草陽、蓑笠坊案山子らとの関係を見ると、どのような文化圏に所属しているのはっきりする。たとえば四穂園金英は『平安人物志』（文政十三年版）に登場する人物で、名を中川丈助といい、京都油小路竹山町北に住んでいた。「『平安人物志』掲載諸家関連短冊」解説によれば、本業両替支配人をつとめ、麦里房貞也社中で狂歌を作っている。ここから察するに横谷南海は小説の舞台の京都に住み、四穂園金英のその交友圏内にいた人物であろう。

二編上巻は気転頓作先生による講釈からはじまる。内容も医療よりも今昔の人の気質の違いを述べるところから入り、医者が患者に対してどのようなことを気にしているかを述べる。中巻も同じだが、上巻では欲面一芳、中巻では太田了竹と沼田蓴斎が師匠に異見をはさむ。中巻の途中からはまた古今の人の気質の違いに戻ってしまう。全体的に医療の話が少なく、ネタ切れの印象がある。巻末には予告がなされ三編を出す意志がうかがえるが未刊に終わったのもそのためだろう。しかしながら、初編・二編あわせて当時の医者の事情が見えてくる江戸時代の医者小説の秀作といえる。

付記　本翻刻は科学研究費補助金基盤研究C「近世文芸と医学に関する総合的研究」（研究課題番号15K02247）の成果によるものである。

当世医者風流解二編序

医者風流解刻成て匙加減頗当代の人気に合、日々門前に市をなし、玄関に番をとりそこへも爰へもと繁昌なるは所謂薬かしらの利目か先生の高見、耆婆扁鵲も（序1オ）御辞義をさし、仲景子邈も酒屋の丁稚のことく先へ行ものかそれ跡から来るもの狼狐のごとき欲面毛ふかき版元かまた先生に二編の著述を乞、先生曰行者は如レ角か隅からすみ迄評判よく強ね（序1ウ）ば喰れぬ茶やのもちもまたひとしゐのおそれなきにてもあらす、此頃病家夥しく実に書見に寸暇なし、明日代脈をつかはさんと寄宿の学頭佐藤養寒（序2オ）二番煎じの薬受、ちと甘口にいふことはかり

文政いつゝのとしいさみにぎはふむまのはつ春（序2ウ）

当世医者風流解二編惣目録

上之巻
気転頓作先生講釈の事
御世万々歳有がたき事
医者病家にて心得の事
医者一つの秘密有事
医者流行心得の事

中之巻（目次1オ）

医道奥儀の二巻伝受の事
医者流行早出世の事
同当世仕うちある事
同両段言葉つかひの事
世上古今風儀変りたる事
爺親子息を丁稚奉公に遣す事
同丁稚奉公仕やう言聞す事（目次1オ）

下之巻

子息か親に異見の事
当世の人気をさす事
娘を奉公にいだす事
并娘智恵づく事
以上目録畢（目次2オ）

つまゝれてゐたともしらてまた二へんよむても見やれホテ天狗連　間抜親玉（目次2ウ）

当世医者風流解二編上

抑医道は一切諸道の元源にして。天下国家の乱れ其外種々の難苦心体二つの病煩をも能愈すを以て。医といふ。医はいすると云ことにて則惣名也。然るに何の比よりか世人是を誤つて人の病のみを治するをもつて医とおもふは。大なる辟之。人の病ばかりを療する業なれば病を治す職人のやうなものにてさのみ

尊むにあらず（1オ）されども又人の病苦は絶がたきものなるがゆへ。是を遁れんがため不得止尊敬するも又むりならず実に医道は一切諸道の病煩をすくふ仁術にして気転頓作大先生前編へんにも著せしごとく。古今相違の悪を懲して善に元づくの道理をさとし給ふ。薬に本朝無双の良医たること其名四海にはびこり。枝葉日々に栄へければ。其勢ひ。朝日の昇るがごとく。高弟たる権勢弁口。高（1ウ）息不斎。太鼓弁慶。茶釜順廻。厚釜敷安。茶羅倉勇安。藪柄棒安。欲面一芳。太田了竹。沼田蓴斎を始として。其外東国西国四国猿のごとき初生に至るまで。我も〳〵と日毎の入門誠に目をおどろかす計也。さるによつて先生の講釈日も。月に六斎と定める。扨その賑ひは昔天竺霊鷲山に於て。釈迦の説法もかくはあるましと思ふ程の繁昌也。其日の刻限に移れば。（2オ）

医者のふりとくと聞へしいにしへはかしこい人も教てすんたか

京都　四穂園金英（2ウ・3オ）

大先生敬々敷咳ばらひして徐々と高座に上れば。門弟一統稲の風に靡がごとく。隅からすみ迄頭をたれ。尾を振廻して平伏す。其高座の飾付は。蜀紅の錦の座蒲団の四隅に金銀のかなものを打たるをしき。前には黒壁に靄菱橘等の高蒔絵の見台の上なる書物は。所謂当世医者風流解を置。傍なる書箱には大体見脈論。無学文盲記。すか丹方彙。しくじり抜の伝授。一文不知論。（3ウ）病家なびき草。其外蘭方ケレンケツレなとあらゆる書物をつみ。右には腰高の茶台に錦手の茶碗に砂糖湯をくま

せ。左には青地の香炉に伽羅麝香沈香焼香まつかう種々の香をふすべ其匂ふん〳〵として鼻の穴をつらぬき廻つて尻の穴より出る。時に先生さもしかつめらしきおもゝちにて門弟中に示して曰。扨何れも是迄前編にもあら〳〵説聞せしごとく。只何事もむかしと今の人気と風俗大ひに（4オ）振替つてあるゆへ。昔の療治の伝にては医道行ひかたきことを。先譬へをもつて説聞せ申べき間。臍の下のれこさの上に決着すべし。

扨昔乱世の砌は。国々たゝかひ止む事なし今は御世万々歳と治り。刀は鞘に納め。弓は袋の紐を解ず。甲冑は虫がつゞりて開帳場の宝物となり。鉄砲は忠臣蔵五段目の道具と定り。家の古券は質屋の蔵に納り。実にせいひつの御代の難有事（4ウ）中々言葉筆にも尽し及びがたく。然るに愚なる人は。昔と今は違ふといへとも。やはりお日さまはむかしから今に東から出て西へ終り給ふ。雨もやはり穴から降ば替つたことはなけれども。昔乱世には御侍などは常に首と腹とに墨打して。恩愛の妻子を捨。遠き国などへいたりて日々合戦止事なく。食物は飯と塩のみ。菜なんどは思ひもよらず。ひだるくさへなくばよしとして。折にふれては水さへ喫ず。二日も三日も（5オ）続さまにはたらき。倹岨を登り海川を渡り。大ていの懼しきことならずや。又民間の者は家に安閑とすること不能何時なしに焼立られ又は追放れ。親子夫婦も別れ〳〵山の奥にかくれなどして歎きかなしむ計也と聞及ふ。今の御代は中々さやうの事は夢にたも見ることなく。薩摩の果から奥州の果まで往来しても。誰がめつたに。天窓一つはるものもなし。薄き四部板一枚を当にして大あくらかき。高（5ウ）いびきて寐るやら。隠居さんのはしまめから女夫げんくわ。丁稚の捨子まで。隅からすみ迄しつかに治る望みに任せたる家宅をいとなみ。雨露にもうたれず。衣類は嶋がら小紋柄を好み。其外新物じやの当世粋向じやのと云て。色々の染もやうなどを好み着たいものは着次第。女子の頭の櫛かうがいかんさしなどたいまいべつかう金銀の細工などの結構なるさし物をさししだい。けつかうなる衣裳着たる面白ひ芝居は（6オ）

胸に手をあてておもへはこわいこと見ぬいにしへの
夢におそはれ　蓑笠坊案山子（6ウ）

舞扇さすかゐなにそはらふたなあくまてくらゐうたふ君が代見次第。其外うたひ浄るり端うた音曲は聞しだい何によらず。思より次第。生渕をはじめ。町中の料理やなどどこの鯛の汁茶碗むしの加減がよいわの悪いわのとこゞと八百を言て味ひものは喰しだい茶やへは行しだい遊びたいことは遊ひしだひ。其外何によらすしたい事はし次第。子はなんぼでも拵しだいナゼ其やうに勝手侭に子をたんと拵るといふて何所からも咎めにくることもなく何一つ不自由のないけつかうな御世の難有ことをむかしからこんなもので（7ウ）此筈のことのやうにおもひ。常に三文とも思はす。夫にむかしは時節よけれど今は時節が悪ひのとは是かマアどこに時節かわるひ。あんまり時節が能過て米

の飯と味噌汁が天窓のてへんへのぼつて杉立して居るといふもの也。むかしは金もふけが有たけれど今はもふけがなひといふ人もあれども。むかしは奢らず。今はあんまり結構て奢過て雑用ごけと云ものにて銭もふけのなひのてはなひ。ほたへたい（8オ）程ほたへ過て算用が合にくひのジヤ銘々只手前一人前の時節のよしあしと云もの也昔ばかりが時節のよひ物なればなんのマア命を的にかけて軍する人かあるもので。軍にまけて殺された人などは定て時節が悪ひと思ふたてかなあろアヽマア芝居を見たがよひみな昔の事て序から大切まで皆難義尽なこと計をよせた物シヤ其内おはん長右衛門などは一寸としたことからちよ〳〵くり合とんとつまらぬことだらげに（8ウ）なつて心中とて死なねばならぬ程のしゆみ方な難義な道行を。いかに叮嚀なと云たてゝ皆そろへの上下を着て惣出がたりてはんなりしてゑらふ面白わのなんのとはあんまりあほらしうて訳がしれぬと云もの也些でも深切な気があれば。大抵マア気の毒な内じやない。今乱世で軍か有たても。むかしのやうに弓鉄砲でもがきはせぬ。先十露盤てつもり上天秤ちぎ秤ことを胸のうちにたゝみ算用して（9オ）軍の勝負の先を得と見通しつけて。四六五六に曖ふて落合付埒明て仕舞。何でも十露盤高い方が勝軍になつてイコウ鑓先に骨折ふよりしんどのいらぬ口先て大抵なことはちやらつかして仕舞時節にて。むかしは鉄砲を以て人を殺すことあれども今はポン〳〵とてつほうをはなして銭もうけの種がしまにするも皆御世太平のしるしにてソコデ世界中の人がとかく太平楽をいふことが流行なり（9ウ）むかしは世界中をしてやらふと云謀叛人もまし有とも今は大違ひにて世界中を一所へ引よせふ〳〵とする人か沢山にあるも是全く御治世のありがたきしるしといふものなるべし

昔は雪をつみ蛍をあつめて学文せしが。今はさやうなしみたれた事では当世の学文は出来す。子曰ド、イツドイ〳〵浮世はさく〳〵と青楼に通過せばかならず極の書出しを見てよつ程胸に（10オ）

闇りにあらて引たるしら瀧は極に名ある月の出かたり

閑々坊免連主（10ウ・11オ）

こたへて曰後悔先に立ず。提灯持跡に立ず。勤さしては男が立ず。枠すぎてはむすこが立ずシヤトテ請出す金はなし。なんと昼夜唐人の寐言を学ぶも是皆衆人を済度せんと思ふ大行なるべし。依て士農工商とも夫々備りたる家業を無油断つとめ。世界のため人のために成べきやうにとはげみしものなるが今はそんな事は。昔々の一つ噺祖父は川へ洗だくに婆々は山へ柴かり（11ウ）にといふて教へねば小児ら迄がきふくせぬといふ時節なれば。孔子も時に合ず。狩人猪に合ず商人算盤合すといふこともあれば。青表紙を読ずとも遠き唐の唐人が。昼中の日中に。船の中の船中で。半紙の紙に山中の山中で。御神前のまへなる万事の事を絵書ていたと云やうなおもくろしき金言をいふても大事ない。軽口まじりの赤本のしやれても読で匕の先より口先のよふ廻るを能（12オ）とすべし。病家をくる〳〵廻て口先さ

へよふ廻れば薬も廻る。薬かまはればおのづから丸いものもよふ廻る夫について何も角もくるり〳〵とよふ廻る是をなづけて淀の川瀬の水車でござり升ソコテ病家も一統に声を揃へてヨウ〳〵と大声あげて誉る也時に先病を見分んより。病家の身体をよく見分て。貧家にて高い薬をもらず。是は薬代をふまるゝ時の用心と知るべし。又福家の病人には（12ウ）随分深切顔して。追従をいふは是肴料の催促と思ふべし。病人に義理をかけるは。外の医者に乗かへられぬひかへづな。乳母に悪まれてはいとんぼの療治をさゝず。侍女下女に愛を含てあぶらを流すは薬をすゝめさすの謀。賄ばゝの気に入ずんば暑寒の見舞ものをへつらなく。小児をいとんぼ〳〵と可愛がり折には菓子や甘草肉桂などをちよとつゝ遣るは親を取入る当世の（13オ）捷丁稚下男を誉は世間の評判をよふさし夜よなか。尻軽に呼に来るこんたんと知るべし。扨又病人を孝察に。少し見識ばればむつかしがつて呼に来ず。あまり頭を下げてひくめにすれば。当世の太鼓医者のやうに思ひくさつて珍重がらす。病家と心易くせねばツイしたことにかゝりくさらず。餘り取入れは心安ごかしに薬代の相庭を下げてまだ其上肴料迄おこしくさらず。病が早ふなをれは薬が売れず。長ふ引ぱれ（13ウ）ば外の医者に乗かへくさるし。病家への出這入もせはしのふすれば。病人をおよそにして景気づかしをるといひくさる。又尻長ふすればいやかるくせにはやらぬ医者じやとそしりくさる。余り学者らしい顔付すれば学はよけれど匕がまはらぬといひくさる。匕がまはれは気転ばつかりて学文はとんとないといひくさる。子細病気の容体をいへば狐をつかふかといひくさる。早ふ大きな家へ出て些はでにやら（14オ）かすと的は山子いしやジヤと評判しくさる。又門がまへ身の廻りかくとふにすればあれはむかしから大根医者のしみたれじやなどゝあなどりくさるし。年が寄ると殊勝て尤らしいが昔風で当世の風にむかぬなどゝ皮かぶりのやうにぬかしをる。何ぼ上手ても若けれはまだよみがこまぬと心元ながりくさつて内義や娘の腹はめつたに取されぬとうたがひくさる。又病家から薬数を付落して尋ねにうせる時にあらましいふて（14ウ）やれば。医者の内にも水上帳や花帳があること笑ひくさるし又得と覚へませぬといへば幸ひにして付落だけ恍たやうなあんばいて薬代少ふおこしくさるし。病家へ行に少しぶきやうな風すると跡で舌出して笑ひくさる。中から下へ乗て行ば。むつかしがつてよびくさらず。又中から上への所へのらずに行は目上の大病人しやによつてたとへ下手でもだんない乗物医者でなければ世間体かすまぬとぬかしくさる。乗物の出這入がぶきよふなと（15オ）乗つけぬから乗物のやねであたまをよふ打と云て笑ひくさる。病人はさし置娘や侍女どもは襖やせうしの間からのぞいて何なりと見出そふ〳〵として居るから大抵気を配らねば得ては穴を見出されるものなれは。大むね右号の品を書抜して。薬箱に入置折々となかめて心得るか上にもこゝろへ置くべし

夫医道に一つの大秘密あり。いつれもてくらの紐（15ウ）をし

めて御聞あるへし昔の医者は病家の貧福をゑらはず人の病苦を助んための仁術なれば。見へ名聞をつくらず書籍に眼をさらし病をさへよく治せば医道の業に叶ふて思ひしものなるが。今は中々さやうなことでは病を生涯治す事なりがたし。先第一の秘密と云は。専ら見へ名聞をつくり能弁口を廻し猫なで声をつかひ。などしてたらし込ことは向ふ目安にも臨気応変にすべし。譬へいか程博学（16オ）

惚薬ようきゝ過てわしや外のお医者はいやときらふ恋病

から竹旅丸（16ウ）

かいてのくうそくらい夜を提灯て走り廻るは匕のはやり医

竹葉舎月雄（17オ）

多才にして上手たりとも。病人が惚れてくれねば。療治する事不能。是には我門弟の内権勢弁口か秘術を行ふへし。餘りけんしきばつて容体をくはしく云て聞さねは便りなく覚束ながつて。かゝりおらず。又口不調法て無口なれば病人か信仰せずジヤト云てあまりしやぐり過せばいやみか立て病人か嫌ふもの也又あまり念入て叮嚀に長たらしう云と其内にはくづか出て容体か間違いすかたん云てゑらふしく（17ウ）じるもの也。とかく病人によろこばしの嬉しからしのほれさしのいやみなしに少しの仕打にて得心さすべし何じやあらふとアノ御医者さんならではならぬと一心に思ひつめさしほれさす時はたとへはたからとふ思ふてもこふおもふても医者かへることなりがたし。されは爰に一首をあらはす

両方からおもひつめたるこりめしのはたからちや〳〵の入れよふもなし

と先生しめし給へは欲面一芳すゝみ出て云。我よく（18オ）ふかく面の皮厚しといへども内證うすくしてゆすること不能。たとへいかやうに申下つて医者いらしい顔しても初生かなはぬことじやこさりませぬかと難問しければ先生答曰イヤ〳〵さやうてあらず。産前のれうぢは力なくとも此ゆすりがなければ子が生れず。又口は至て重宝のものにて尤関所番所もなければどのやうな太平楽をいはふとととのやうな大をいはふとうそをつかふとあぶらをなかそうふととんとしんといえずに（18ウ）とのやうなちやらくらくわそふと自由じざいこゝろのまゝなるもの也ソコテ是を名づけて弁口ふはいの玉とは申て世界中の宝とはいふもの也

扨先竹より述るがごとく医道の大意を得とくすれば目たゝく内にあちらからもホイこちらからもホイ〳〵〳〵ホイノホイと足元から鳥の立ほど閙かしく中々四枚かたや五まい肩くらゐな。そんなへどろいことでは間に合ぬ自身直に乗物かいて歩行ばならぬ位引つり（19オ）ひつはるほどに。其時の心得じやが誠にとふもこふも手足のまはらぬ程いそがしい時は。自身薬箱をやつたらおふて尻からげにわらんすはいてかけ廻り乗物若党は。跡からゆる〳〵念のため供代取て廻るといふ位にせねは数多の病人を引受る事いできぬほどに。今の内に鬱金のぱつちに萌黄もめんの風呂敷でもちやんと仕込んて其時の用意して置たがよ

い（19ウ）これがまことの濡手で粟といはふか。足のうらにとりもち付て両替やの店て三番叟ふむといはふか。惚た娘の処へこんな拵取て養子にいたといはふか。嫁入した翌日先のしうとめがとんししたといはふか。こんな味い事の伝受はないとの給ひければ。門弟中声を揃へそれは有がたふ存升が爰に一つの難病あり此節当世医者風流解と云大新板の本か三ケ津は申におよはず（20オ）国々所々浦々嶋々迄大に流行ますゆへ此せつ病家でめつたなことがいはれませぬ。あたり前のいはんならぬこと計云てさへ。あれはみな医者ぶりげの中にあることじやとぬかしてゑらふ笑ひくさる。ソコデ此せつ病家で何にていはれませぬ病人も達者もたがひに気が廻つて疑ひが付まして療治がゑらふしにくふこさり升ソコデ此節大医方はみな寄合て医者風流解の評判まち〳〵（20ウ）にてござり升全体マア医者の為にはきついけんびきてござりますゆへ。けんびきに灸すへましてもとんと治りませぬか何といたしたものでござりませう。先生曰ソレハちいさい〳〵所詮とるにたらぬ其本位におどろくことはない。都て表裏の妙術といふことあり。其裏表をつかふを上手とも名人とも。恋師とも。ほれさしともいふ也。まして予か家の妙術は表四十八手。裏四十八（21オ）手合て九十六手に百でもらふか手拭かふかこゝがしあんの真中の上手段といふ所を説て御聞し申そうふから得と聴聞あるべし

医者風流解二編上　（21ウ）

当世医者風流解　二編中

扨上巻に説くこと表裏の手段といふ其裏の裏へ廻る事さへ上手になれば。はやく立身出世の桟を登ること心安し。されば此うらの又裏へまわることを工夫すべし。此処をしらずんば終にうらの裏へ引そくするもの也。又裏のうらといふを取違へて雪隠などへ這入べからず。夫医者風流解は当世流行ものなれども何れ（1オ）にしても此奥義を見開ずんば医道終に勝利を得ざる事うつゝ小便をたれるとあれば。今とき金匱傷寒論くらひではとんと間に合ず。先当世のきゝもの芝翫論に璃寛論の二巻を以て銘々方へ教へ申べき也。抑此芝翫論は裏のうらをよくさとして数万人の気を一息にのみ込わづかの詞のひつはなしと一寸の仕打にてヤレ加賀や大明神などゝ諸人をおどり上らし歴々の（1ウ）高ふとまつて居る鼻高仙人までもちよさいぼうにしてまよくり廻す事此芝翫論にとゞまる也。又璃寛論は。世界中の女生娘遊女てかけ後家尼人の女房迄ヤレ璃寛さまおかしまや様と咀しを聞てさへ。手を合せておがみうつゝをぬかし嬉しなみだと水ばなとよだれとおならと小便とを一度にどつとたれさして悦ばすも狐がのぞくさいの〳〵した事南京かぼちやに渋はいたよふな（2オ）

受領する浄るり世界の本師ても狂言綺語の歌舞伎かよいとて　翁草下手也（2ウ）

市なしてよいしろものとたか目にも

かゝるは当世はやりものなる　同し（3オ）

婆さんまでかりくはんさんかみかんさんならと歯もないくせにかぶり付たいほど。可愛と思ひ。世界中の女子か車輪になつて悦ぶ程にきふくさす事此璃寛論に止るへし結て此二巻の奥義を委細に説申さん間銘々持まへのしくろでもにぎつて緩〳〵と聞かるへしとて先生はなしぢの紙にてフン〳〵と鼻をぞかまれけり

扨爰に一つの手段あり。道を往来するにねはくろしく（3ウ）遅く歩行は不景気そうでよろしからず。たとへ初家一軒もたのみにこず。とんとはやらぬとも閙敷そうにとばそわと走るかごとく早道にあるくへし。左も上手ではやる医者のように見ゆるもの也。且又遊所へ取入芸子や妓の療治よくして内へ引よせる町は世間へ目立。四五人て連立来ると百人も二百人も来やうにかさかけて評判するが世間のならひなれは何でもアノ医者は上手ではやるかして遊所から迄朝からばん（4オ）迄行詰じやなどゝとり〳〵評判して近所の赤親父や小息手代など少しのことをかこつけにして我も〳〵と出てくるやうになること夥し。是則声無ふして人を招くの術なるへしと云ければ。太田了竹向て云。今先生の御工夫中々妙計おそれ入所なれども。私は御存知の通のぶ粋文盲者にてこさり升れば。遊所の事は一向不案内に御さり升か私の娘のおそのと申者聟に泉州堺天川や義平は男てござると尻まくつて（4ウ）前のものを見せ升ほどの念者でこさりましたか夫で其場にこさる御侍方も一統にヱイなる程どふ思案しても男に相違はないとおうたがひが晴まして其悦ひに蕎麦切を喰ふて御帰り遊はされましたか其大義の御出入先の大星ゆら鬼さんとやらいふまた以前かた様が祇園の一力とやらでおつくしなされた時分に遊所町へいくでもなし。いかんでもなし。猫がばゝふんだやうなものでござりましたが。全躰マア茶やの内に（5オ）病人と年寄はとんと見へませぬがとふしたものでござります。と眉に八の字を書て尋ねければ先生答曰夫は其許にかきらす。誰しも最初はさやうに思ふたれど。七段目の茶やのがくやへ。這入て見れば中々沢山な病人思ひの外閙しいソリヤ太夫はんかすつほんのほねか咽に立なました程に今来てくんなませのイヤさつまいものむし立を沢山たべなまして夕部からおいとの穴から咳がてなまして今に止りなませんゆへまふ来て（5ウ）くんなませイヤかむろかもゝのたねに疵が付たはのイヤ芸子がとやへ這入ててぬはの。若衆が唐土論のこふそふシヤノ振袖が大ふくろべしたわの。居候が茶があついといふて飯うめたかるわのイヤ幇閑の欲八が顔の皮かやぶれましたから縫ふてくれいの。本詰の入歯か落たわの。仲居かはしこ檀から転て陰嚢すりむいたわの。イヤ出入の座頭か御客の天窓へ熱湯をあふせたわのイヤ坊様の御客を尼出か川中て（6オ）

一本の茸を見付て手柄顔とつく〳〵と響く山彦　金英（6ウ）

舞扇さすかはなにそはらふたなあくまてくらゐうたふ君が代見次第。其外うたひ浄るり端うた音曲は聞しだい何によらず。思より次第。生渕をはじめ。町中の料理やなどどこの鯛の汁茶

南陽館菊江（7オ）

碗むしの加減がよいわの悪いわのとこゞと八百を言て味ひものは喰しだい茶やへは行しだい遊びたいことは遊ひしだい。其外何によらす。したい事はし次第。子はなんぼでも拵しだいナゼ其やうに勝手侭に子をたんと拵るといふて何所からも咎めにくることもなく何一つ不自由のないけつかうな御世の難有ことをむかしからこんなもので（7ウ）此筈のことのやうにおもひ。常に三文とも思はす。夫にむかしは時節よけれど今は時節が悪ひのとは是かマアどこに時節かわるひ。あんまり時節が能過て米の飯と味噌汁が天窓のてへんへのぼつて杉立して居るといふもの也。むかしは金もふけが有たけれど今はもふけがないといふ人もあれども。むかしは奢らず。今はあんまり結構て奢過て雑用ごけと云ものにて銭もうふけのなひのではなひ。ほたへたい（8オ）程ほたへ過て算用が合にくひのジヤ銘々只手前一人前の時節のよしあしと云もの也昔ばかりが時節のよひ物なればなんのマア命を的にかけて軍する人かあるもので。軍にまけて殺された人などは定て時節が悪ひと思ふたてかなあろ。アヽマア芝居を見たがよひはな昔の事て序から大切まで皆難儀尽なこと計をよせた物シヤ其内おはん長右衛門などは一寸としたことからちよ〳〵くり合とんとつまらぬことだらげに（8ウ）まねびをして物やはらかかに理をせめて。しかもこたへる詮義の言葉といふやうな重忠もどきといふ所かしやうねば也。と心得べし。第一青黛のかはりに衣たいを飾り当世脇差一本にては身ぶりがしにくいから長き刀を差こはらし。山医養仙さんの御見舞と仲元が觸込とかの芝居の御上使の心持にて刀をさげて徐々と奥へ通るやうすいかにも思ひ入あつて上手らしく病家に花道がなくて（9オ）少し気の毒也。誠に紅粉はぬらすとも顔の皮を厚くするか肝心也と思ふべし

夫医者第一の秘蜜といふは。前編にもいへるごとく。両端詞といふみちを得と承知ならては得ては病家でまごつくことありて甚見ぐるしきもの也。とのたまひけれは。沼田蓴斎進み出これ肝心の事にて候両端と仰られしは段が二つありと申ことにてござるがイヤさにあらず。両端から駒が出たといふ（9ウ）やうなもので。両方へわたる詞なるゆへに両段と名づく。たとへは。病人ぞふ〳〵と寒けがいたしましてみづばなか出まして頭痛の気味がこさりますと云時。是全く風を引たる證也熱あるゆへに頭つうあり是則逆上といふものなれは何分はつさんすればさむけもおのづから去り熱さへとればさつはりして心よくなり升など丶いふべし。風信のこと所のやうすに順していふへし。又大病なれば病家は病人に（10オ）気をとられて心つかひの中なれば。どちらへもつかすの詞にとんと気の付ぬもの也。又大病にて命に気づかひこさりませんかと尋ねられし時ヱイ成程さやうでござり升餘程お弱りのやうすも見へ升か全くこれは御つかれのあんばいでござり升。いかさま手足に少しむくみがござつてしびれますのはめぐりのあしきあんばいでござり升又寒かつたり暑かつたりいたして気色のよしあしともに是皆熱の往来の工合（10ウ）とて胸へ〳〵とあつまり升かゆへ御食事なとも

納所へ納りかね升から食も上られませぬと申もの又咽をぜり〳〵〳〵と上へせり上ますれは是が則ゑづきの気味あい。あたまのいたいは。づつうのあんばい頂上へのぼりますればこれがおいとまごひと申ものなれとも又題がもとへ戻りますればソレ江戸じや〳〵ゑどさへつけば随分御本快もできませう本快すれば又おたつしやになれますし。また（11オ）御寿命さへあれば命に気づかひはござり升まい何分御大切に御介抱なされませ。其内毒なものはあまり御上なされますなまた明日と立帰るへし

評曰　との医者にても食物の毒いみは多く念を入て止るなれと肝心の大毒となる右の毒いみはつよくもとめず是は全く自身も覚への有事ゆへかつよくとむることなりかたしと思はるゝ也

扨昔と今と風義の変たるといふいつぱい。昔は極のばらひなともすつはりと払ふことをよしとせし（11ウ）ものゆへ人の心も安からず。当世はあじわひよふ断いふてちやうつかすことを粋とも手柄ともする世界なれば心も安く世を渡り。常に借金の冠をいたゞきて和歌をよまず。みそひともしの雑水をすゝつて身上の手縄を引しめ。馬の稽古よるは借銭こひに追れし時の逃けしたく。士の魂は算盤のけたに変り芸子の箱は枕と変し。百姓は袴羽織てたごを荷ひ。職人は商ひをのそみ商人は文才（12オ）

貸主に逃行馬もおなしはやまたなしかへせとくるやおいかけ

しらふの鷹道（12ウ）

お出入のてう人のかね借らぬやう

そろはんつめのかたい武家かた　鳳足斎無名（13オ）

を好む出家は妓女に心をうつし。役者幇頭は茶湯を好み。客は役者の物まねをするやら。ゑづくろしい大なからだの杉の木のやうな手を出して自慢顔していけもせぬ舞をまふやら程々の下手くそ芸をする。又遊女も内證て縫針洗たくすれば。町方の娘は三味線をはげみあたまの髪は下手な献上物のできぞこなひのやうになし又は遊女めかして作る。都の人が遠き江戸なまりをまねび又は武家風をまねひて肩の行の短き着る心に羽（13ウ）織の丈の長きは太神楽の笛ふきか。歯薬売の親方にひとし。たけのこ笠の深きをかぶつたるは。辻立の八卦見。手の筋より細き胸算用のさん木を以て。目先の利の卦にはすゝみ。損の卦には退く事早し只人のかすりを取羽二重げんかいの悪肌を考へ家相のわるき貧者をきらひ。夫に引かへ婦人の卦にかゝれは心の天眼鏡を曇らし善悪の分ちなく妾くるひに現をぬかし涎を流して二番ばへの短かきはな毛に至（14オ）までことめいさいによみぬかれ果は腰をぬかすといふも是皆悪ぼたへするがゆへなるべし

むかしは妾が旦那の気取をしたものと思ひしが今は旦那が妾の気取をせねば。旦那に暇をいだすといふものか作者も此訳は知らぬとも。是か当世といふものと見へ升。ソコデ諸芸の師匠も何程ぶきやうな下手くそでも。夫をとんとしからず。おまへの浄るりはゑらふ筋がよひちつと実を入てけいこシテジヤとぐつ

とこうみが出来（14ウ）そうな所が有などゝちやらかしあたまをさける。弟子は師匠に尻をふかし。坊主は妓女の状によだれ流して極道の辻子に迷ふ。俗は経文よんで坊主を導く。欲顔一芳横間から夫医者は病家から貰た肴を集めて市に出せば。肴やは日傘をさいてみなやつて歩行。男が綿ほうしかぶれは女が羽織を着手拭かたにちよいとかけ。カノ悪所ぐるひはいきなものと唄はねばならぬ風俗。又髪はこたい付とやら大櫛（15オ）とやら只かんざし一本にて櫛かうがいも兼合し嘸が商ひすれば亭主が飯たくか娘がつくり立て掛取に廻るか大抵面白世界じや。身には綴を着ても下には緋ちりめんのゆもしをかき又浅黄色の綿ほうしを被るは当世の粋といふものならんと云けれは先生の曰古い〳〵そこしのことはさて置。歴々の奥さんたちの風俗を見るに頭は千手観音の背中のことし笠や〳〵〳〵とかうかいかんさしをつきさし。足には五枚かさねの（15ウ）草履をはき着類は人形仕立とやら役者の舞台衣裳見るやうに。ふきは夜着のごとくにふかくぼこ〳〵と着こなしべら〳〵とした所はしつかい手づくしの仕立た着物の綿の落たるやうに見へてヲゝぶさいくなものと思へども。是が当世風じやとやら粋じやとやら甘とやらよつほどたわひもない洗たくて土けの落ぬ風俗也。全体女は見へる所より。見へぬ所をよく（16オ）能あらひきよめ。清浄にせしものなるに今は只顔計をみがき。白粉をべつたりと塗こめ首すじ元は牛の背中に薄雪の降かゝつたるやう所まだらの生壁色。手足はしつかい横町のたどんやく嫁入して六十一の本卦にさゝれて戻り申したといふやうな色つや。其癖小野の小町か楊貴妃きやうだいのやうな気どりて。あつき餅は。あつのおかちん。ぼたもちはおほたのおかちん。尻餅はおいどの（16ウ）おかちんなどゝ口先はやさけれども心の内には男を三文とも思はず。舅姑は三文の黒砂糖とも思はねは姑をいぢりまはすソコテ姑も嫁に気かねをして癆咳病にならんよりわと。さすがは豆の婆々講中本堂再建の勧化にことよせ。開帳ゑかくの踊念仏。〈紅木綿の襦袢は緋ちりめんゑり裏をひるがへし。鬱金の奥から垢つきたるゆもじももつけの幸ひ。是当世の鼠色猫ばゝ（17オ）

釈迦てさへいたつらものとさとりをや　　菊江（17ウ）

本堂の勧化を婆々もした切の雀とおとりおとり念仏　　菊江（18オ）

踊に坊主も発起すれば。小僧も思案を極めて在家へ丁稚奉公と心ざすを。小僧の親達大に異見しソリヤわがみきつい了簡ちがひぞや。町方へ丁稚奉公に行たら中々塩肴の一疋ふんたに食ふことは出来ぬほとにやつはりお寺にきけんよふ出家をとげやると生肴の一疋も安楽に喰れるじやあるまひかとの教訓よつほとよふさとりをひらいた親達じやと達磨大師も棚から転けてかんしんし（18ウ）給ひしも道理なるへし

昔は子息を丁稚奉公に出さんと思ふ時十三四才位迄親の手に育相応に読書さん用行義などもかなりに教へちとても主人の世話

のがきなきやうにして遣らねは親の恥其子のかたみのすぼらんことを思ひしものなれども今時は九才か十才計にもなれば近付の人をたのみ此方の伜も最早そろ〳〵と奉公にたさねばなりませぬが。とふぞ相応によろ（19オ）しき所がござりましたら御世話なされて下さりませと頼みければ「近付　どふいふ所か御望じや「ヲヤ　ハイ所詮よい所はすきませぬマア店方や金借質や両替やなどは気ばかり高ふなつて。手に是そといふ芸がつかぬゆへ中途でしくじつた時は上めい馬の飼おろしとやらてかたに棒置こともいできず。人に頭を下るすべは知らすさし詰親兄弟の足手かぶりとふも仕やうのなひもものゆへとうそ手に職の付所へやりとふござり升」「近付　なる（19ウ）ほど夫へよい了簡ジヤ迚もむかしの人のやうに拾年の十五年のと云やうな長たらしい年切て奉公するやうなそんなべらほうは今時少ナイ何じやあらふと商売の道さへ覚たら能いかげんにひま取て戻るかよひマア先て口過しただけでも徳じや。しかし機嫌よふひま取といふてイヤまつたのもじつたのとぬかしてツイワ埒があかぬゆへ首尾よふよくじつてもとるのが大かたの大関といふものしや「ヲヤ　さやうジヤ其様になかたらしい間安閑とモウ何年て年か（20オ）明わのと指折かぞへて安保が男得やうにしてゐたら主人はよかろふか親は何になるものジヤ迚も一生我子にかゝつて楽せふと云事はならぬもし首尾よふ宿這入する迄つとめるやうな息子を持たら一生親の気の休まる間はあるまい。とふてそんなやつはあほうか病身ものかかたはものかおそまきの因果者でかなあらふ」「近付　ぜんたいマア爰のむすこはいくつジヤイナ「ヲヤ　ことし八つになりおつたけれとからか大きいよつて九つか十な位に言て随分化さるといふ（20ウ）やつジヤ」「チカ　ハテナまだマア八つや九つ位なら先がどふじやのこふじやのと先好んてゐる所ジヤないマア当気したばらの世話さして口さへくはしてくれるなればよいとてほりだすがよいシヤそうして東西がわかるやうになつてから取戻してどこへなりとも思入の所へ奉公にやるがよいとうて一軒や二軒ては尻かすわるものジヤなひほとに。むさんこうに人の釜土をめくらすが修行になつてよいアノ太閤さんみなかよひ何十度丁稚奉公に行しやつるやうしれぬ」「ヲヤ　ソウジヤ（21オ）

世のさまはうつり替れる髪かさり
　まてもゆふ女と見たり似せたり　　鮒岸亭東文（21ウ）
うたかたのゆきの積りは短くて笠のみふかきひとこゝろかも
　　急連主（22オ）

人の運かたと云ものは。とんな出世しやうやらしれぬ。しかしとんな難義するほうが多ひ若出世したらお蚕着て駕かいてこまそふ」「チカ　ナンジヤ貴様出世しても人の駕かいてあるくつもりか」「ヲヤ　ホンニそうじやナ若小つかい銭に詰た時にわ」「チカ　あほういわんせ出世して小遣銭位につまるといふことかあるものか」「ヲヤ　イヤ〳〵そうでない。近年は出世する程借金が出来るそうナ歴々か詰つて難義するものは今と走りの下の溝じや」「チカ　つまらんものはあたらしいきせ（22ウ）る

と病家のないお医者に若衆の尻じや」「ヲヤ　そふじや有そふでなひものは生娘と隠居ばさんのへそくり金と旦那衆の智へジヤ」「チカ　もらはひでもよいものが主人や親の目玉と伊勢の青苔じや」「ヲヤ　たれでもほしかる物は銭と日間ジヤ「チカ　イヤ又やらいでもよいものは乞食に焚たてのめしと古掛ジヤ」「ヲヤ　近年はやるものは女のさすりに女の髪ゆひ女の商人女の掛取娘の三味線。親父のはしまめじや」「チカ　近年はつむものが約倹のはり紙に葬礼の山酒（23オ）ジヤ」「ヲヤ　段々りつぱになる物が茶やの神棚と医者の門かまへジヤ」「チカ　せねばそんのやうによるものか丁稚の常断とたのもし講ジヤ」「ヲヤ　段々ちいそうなるものかすもう取とくばり餅ジヤ」「チカ　年々大きうなるものが十夜袋とにたきの尻ジヤ」「ヲヤとふもしよふのないものが店方のよくしりもんとおかもの古いのジヤ」「ヲヤ　サアそれがいやさに店方や金貸はとんとすかん何分後の百より今五十ジヤ」「チカ　マアとふのこふのといわずに何角なしにむかふ見ずに（23ウ）やつて見たかよい其上で迚も役にたゝぬと思ふたらハテ其時は捨物にして店方が金貸でもだんないやつがよい」「ヲヤ　ヱイぎゑんのわるひ店方へばもやらんなねば親はとうしようゾイナと身振ひするといふようふな時節也。是もむかしは店方へ金貸へでも奉公に遣と大名になつたやうに思ひおもわれしものなれども今ぞはよつ程間ぬけか親の手にあわぬしろものてなければ店方や金貸へは奉公にやらぬとたからかに（24オ）はなししてゐるを店方の手代衆と思しき人立聞して大に膽をつぶしていもにして終にいも売にそ出られしと也

むかしは我息子を丁稚奉公にやる時親が言聞かすには第一旦那さん奥さんのおつしやる事を何によらずハイ〳〵と返事をよふして尻軽にするがよひ番頭さんや若ひ衆に口こたへをせす子供の時は。女子衆に可愛かられるやう。若宿へでもいてきてくれと頼まれたら（24ウ）心よふいてやり。子供同士けんくわせぬやうに中よふして糸さんが有ならば大事にかけて守りしたがよひ。又朝も早ふ起て庭をはき出うへのふきそうじして使は常断せず。夜さりもいねむらぬやうに。手習ひ算盤のけいこせねばおとなに成てから恥をかくあたまかくゾヤ何ジヤあらふと御主人大事〳〵とさへ思ふてゐるとしくじる気づかひなひ程に。よふ耳のあかをさらへて聞て置たかよひとあく迄教訓せしものなりしが（25オ）今では親の御了簡が間違ふて有といふものかなひと云ものかとふした拍子のひやうさんやの親父がふら〳〵と云て来た奉公口もとんな所かこんな所かマア一月と二月といて見ると勤めよそふな内か居にくそふな内かは大体知れるものジヤ是はどふやら面白有そむない内じやと思ふたら。内證で宿へいふて来たかよいソウすると又外によさそふナ口を聞て置てからひま取に居てやる程に。そふ思ふて気を大きう持て（25ウ）ゐるがよいぞや。又三度のおめしも五はいの六ぱいのと喰て見せると内の衆が膽をつふして積気がおこる程に。主人の見てゐる所てはひかへて喰て置て其替りに買ぐらいとつまみぐひとて

入合すがよひぞやそして寐しなにとつくりと小便してねたがよひぞや。たれる事は大事なひが得ては明け方に小便しに行とそれなりにツイ起さるゝものジヤ程にもし明方に小便がしたくなつたら田葉粉盆かはいふきの（26オ）中へでも仕込で置てあくる朝そうじさへすりやよい傍輩のおきるのを寐所の内から考へていて長吉〳〵長きよ〳〵と三四編も起されてからおきんと丁稚一生に餘つ程の損が有程にちつとても人より先へ起たと庭の一つも余慶はくだけでもしんどかたひソヤ又寒ひ時分や夜の短ひ時分には兎角朝起ともなひものジヤ程にあいさには作病おこしてゐるかよひ夫もむかしの丁稚のやうに腹かいたむはのづゝう（26ウ）がするはのといふて寐ると。さながら三盃くふ飯もわざといやそうに顔をしかめて一はいそこ〳〵て仕舞わねは病人らしうなひ。勝手しらずに作病おこすと得ては腹がへつて難義する程に同し作病おこすなら。飯のくへる病気を工夫して。おこすがよひたとへば今朝はぞん〴〵といたしましてさむけがござり升といふて寐るとどんな主人でもなんぞあついものでもくふてあせするかよひと云ものじや程になんぼねて（27オ）

履物にちよとお手かけも本当に直すなんとも旦那か気とりは　月雄（27ウ）

おなのつく鼠も聞ずいたす子はかしこく爺の銭なぬすみそ　案山子（28オ）

いてもひやうろふにつきる気づかひがなひ又使に出るなら門口出しなと戻りしなとを足早に歩行て道でゆつくり常断して遅ふ

戻たのをしかつたらこれは何ジヤあらふと先でまつていましたによつて遅ふなつたのジヤといへはとふもしようのないものジヤ常から伴頭や若衆か青楼へいたり内のまゝたきと塩の目するもいふやうな穴をとつくりと見付けて置て何ぞやかましう云てしかつた時はコチヤおまへのやうに商ひに行やうな（28ウ）顔して内を出てアゝ中宿とやら小宿とやらへ這入込て寐ころんて酒のんたり茶やのかしやおやまつれて生洲じやの料理やじやのといふも飯かひにいたり酒呑にいたりはしわせんわいナ何ジヤいなそして人が一寸いねむるとやかましふ云て ジヤけれどもおまへもじやうじう蔵のおしろや漬物部やゝ。内の二階でおわんどんと二人りあれは全体何してゐるのジヤへよりやふんどしのしらみやゆもしのつぎあてゝゐるのではあるまひし若ふんどし（29オ）のしらみ見るのならくらがりては見へまひし。ひる二階へ上つて見たかよひなどゝ大声はり上て常からのあなつくしを云となんぼ伴頭でも上役でもこれには叶わぬものジヤ此度からこりてしかりにくい程にこれが人に口あかさぬ伝受シヤ又若衆の内證の使や茶やの方へでも使に行やうな時は誠に一日藪入したやうにおもふて気をゆるしてゆつくりと常断しくんたいにするがよいぞや全体常からは使を余り早ふするとあれは使が（29ウ）早ふて埒が明と云てめつたみしやうに拍子にかゝつて使たをす。其方にたま〳〵使が遅ひと目に立てわるひ使は常から早ふせぬがよひ何でも常からのしにせが大事ジヤゾヤ常から番頭や若衆か筆の先のこんたんややりくりするのを見ぬ顔してよふ

見習ふて稽古して置がよひ。其位に子供の内から心がけて置ぬと首尾よふ中途ででしくじつて戻る事出来ぬ必うか〳〵として宿這入する時分迄勤て難義しやんなや。おとなになつて奉公と云（30オ）ものはあんまり切れるものは悪ひ所詮ないもせぬ知へて出世しやうとも思はぬがよひ上の衆の気に入ば傍輩の衆がそねんで何ぞ角ぞでは。けつまづかしおる。又傍輩付合がよひと上の衆の気に入らず。扨も〳〵錦着ての奉公よりつゞれ着た我世といふこともあり鍬つかひより宮つかへと云こともあり大抵つらひものではないによつてちとづゞあぶら取て楽みもなければならぬアノ重井筒にある通り惣体つとめの奉公はたのしみなふてはつとまらぬ（30ウ）と云事もあれとも。今では此文句もちと違ふ惣体つとめの奉公はぬめたでなければつとまらぬと浄留りかたらねばならぬ。奉公して出世しよふと思ふなら。ぢんこもたかず。へもこかずに兎角じゅんさいがよひ。先ぐり上の衆か病気て引か又能娘のある金の有所へ養子にても行かふと思ふ衆が近年は多いけれとも是も養子にか。わるふしに行のかしれぬが。よぎなひ親類の名跡なとゝ云たてゝ。中引したり又先ぐり〳〵上の衆（31オ）がしくじるので。ひとりがでに出世か出来るものじやこれが奉公人か皆実体で一々宿這入したリヤ主人は一向やくたいと云ものジヤなどゝ云聞すやうな時節て何のことやらとんとわけかしらぬと云もの也

当世医者風流解二編中終（31ウ）

当世医者風流解二編下

むかしは親か子に異見するに。四書五経のるい都て聖人の教を引。或は手嶋流の教訓を云聞せ又は世間のごくとふ者の勘当しられたか身の成行手代若い者のしくじりたるものゝ天窓の上つたためしのない事やら。我と我でに難義こしらいしてゐるわけから又実体にして立身してゐる人の行跡など云聞せ。何分酒は百薬長たりと云て（1オ）て結構なるものなれども是を過せば大なる害となる。酒がしくじりの元ジヤ。先酒はのまんがよひ皆酒に呑るゝのじやマア酒は三年程立か三十迄呑す金比羅様へなりとも御願申がよひ。又なんぼ友が悪ふても手前さへきまつて居ればよいジヤないか友達にとんと義理はいらぬ。親兄弟にこそ義理立ねばならぬ何にも友のしつた事ジヤナイ皆こつちの悪のじや年積だものゝ云事とつくりと聞て置たが（1ウ）よひ此度世帯を持てから一つ〳〵年か行に随ふて思ひ出して後悔するぞ良薬口に聞しと云て聞ともなひことは皆よひことしや程によふ聞て置たかよい面白事にはろくなことはナイと惣体身の為になるへき程のことに何からなに迄残る所なく云聞せしかつたら少しはたらしたりして異見すれは能感心して如何やうのどしうたりとも能ため直しものなれども今時の若ひ者なとは能合点するの（2オ）

花はふり音楽に気をひかれては有頂天までのほる青楼　　案山子（2ウ）

三月あしき子異見する世の中はさかさまになら親かあやまり

金英

正むねかわるいと親にこは異見世にあるかたな鍛冶屋ならぬと

亀遊（3オ）

わ適にあれども先稀なることにてゆく其年てはらるゝことなし今は子か親に向つておれかよふなごくどう拵て下されと云て頼んた事はなし名々得心づくて拵て置なから仮初にもまつたのもらつたのと云てやかましい。わしじやて若ひ時は二度もなひ年よつてからとふ楽しまれるもので何ぞどいふと青表紙を云立るか是は大むかしの変屈なとふへんほくの云ことジヤ実語教は小児たらし手嶋流は古い（3ウ）〳〵そんなみつくさいことは何もかも皆よふしつてゐるなどゝ本なまもの知りのあばずれとなり何分薬罐天窓のしはだらけな苦ひ顔てぎく〳〵とした年寄かたぎな昔風はとんと当世むかぬ十年づけの梅干て粋がきかぬといふものジヤアゝ最早〳〵子の心親しらすと言事はよふいふたものじや。とかく親は相手にならずよけて通すがよいちと若いものゝ了簡になつて見たかよい。能いことにはとんと面白い（4オ）ことはない其證據は大学の講釈の有たてゝ若い者は勿論年よつたものでさへ誰が一人り聞に行ものは一人もないソリヤ能浄るりかなんそといふと山のことくに行ジヤないか夫でよふ分てある。今度の芝居は評判かよひと云事を聞ては高い銭を出しながら。隠れしのんで日間かき廻つて。何をほつて置ても山のごとくに行じやないか。芝居へあんばいよふ見れば皆為になるものなれどそんな人はめつた（4ウ）にあるものじやない皆

色事の稽古ジヤそこばつかり見て戻るジヤよいことゝ云たら皆黒犬の尾でおもしろふなひ面白いことや好な酒が嫌になれてゝどふなれるものジヤ年寄てさへチト渋皮のむけた女子と云と目につくジヤなひか。こちらじやといふたてゝ若ひけつき盛りに木竹てした体ではあるまいし。めい〳〵も若ひ時は覚への有そふなものジヤ何ぞといふも年寄の癖に。こちらかわるひ時はどふで有てこふで（5オ）有て誰がマア見に行れるものてもなし知つて居たものも今迄生ては居まいし。しうとめの十七八か受られるものか今では。親父らしい顔して居るけれと若時ミナ相応にウンテンカンも尽くしてゐるジヤテイ仮初にも眼玉キユツトむき出した所を見ると。直にむつと気かふさがつてきて猶呑に行ねばならぬやうになる。浄るりや舞など其外色々の稽古やへ這入込で飯時分に終に揃ふて喰た事がない。いつでも櫃の（5ウ）ふたの上に膳立しなから片付て仕舞ねばならぬハノ夜さり遅ふ戻るのを。内に居て待ほどいま〳〵しいものはないワノコレ其よふに浄るりにこるとの。家蔵をみな売てしまはねばならぬゾヨ名揚た所か一人の口過たけのことジヤわのと。おしやんすけれど夫が了簡違と云ものじや家蔵は随分売けれど名揚ることが出来るものじやない。親のいふ程のことは皆とろくさいしかしソウハ云ものゝおれがやうに商売嫌ひのどらもの（6オ）でも済まいと思ふ。ウンテンカンのあつい〳〵を心かけ透間でもあつたれば。ちとづゝなりとも商売の方もせねばなるまひと思ふ。好なことや面白いことが止めらるゝものじやないマア何

じやあらふとマアつゝと行てヲヽコレハマアお珍らしいどつち風が吹たやらサアおあがりと云イヤ〳〵コチヤけふはちと用があるサア其用はわたしの方でいたしてあげるワイナアイヤ〳〵といぢばる内風呂敷包や羽織紙入の類ひひつたくりサアおあがりと玉子のにぬきのやうな手て（6ウ）おの木のやうな手を持て二階へ引つりあげよると。加藤清正の力できばつても叶ふものじやないサア二三枚出て来をつて引かけよるとふもこふもたまがられぬものじやない。どふマア是がうるそふ思はるゝものじや扨も〳〵子の心親しらずとはよふいふたものじや又親が有て悦ぶ子はないともよふ云たものじや。親も又真実子が可愛いふてとこの親の了簡でもとかく子のためになるやうにして置て身体を譲つてやると（7オ）ヲレガ死だ跡でも何々迄も為かよひと思へどもコレガきついすかじや生て居る内てさへ親の云やうにせぬものが死た跡でナンノマア親の思ふやうにするものじや。おとれか腹に入たやうにてなければはするものじやない。子がまたなんぼ銭つかふても。しつとして辛抱して居るがよいしんほうする間には。貧乏するソコデ工面か悪ふなると十めん作らねはならぬ。むかしは親に孝行にしたものなれと今は嘗に孝行にせねばならぬとかく若ひ（7ウ）もんの云事をよふ聞て置たかよひ。皆後学になるちつとは又子の心にも成て見たがよひとことをわけて親に異見しければさしもの親も感心して。扨も〳〵子といふものはけむたい物じやと云時節也

歌に　我か子とてまゝにはならぬ節分の豆さへ親の手にあまりぬる

爰に又去る方に石部金吉金甲といふやうな。青石親父の大始末人ありけるか其子息に又親父（8オ）

浄るりの会聞人はふし竹の夜々にふけるはうし若連中　きたさと（8ウ）

堅い書はのそくものさへなかりけり講尺の場もあきの夕暮　杉門亭木太丸（9オ）

にふくりんかけたる程のしわん坊。常に塵紙壱枚にて拾辺もはなをかむのも奢と心得わらて尻ふく手鼻かむといふ了簡ゆへ彼はなかんだちり紙を火鉢にてあぶり居るを。いかなる親父も是を見て胆をつぶし何ぼ始末すると云ても勿体ないはなかんだ紙を火鉢てあぶると云ことかあるものかと大にしかりければむす子答曰是じやとて小判のはしくれジヤもの勿体ないトウマア捨られふ」「親父　目をいか（9ウ）らし何若いと云たてもよふ思ふても見たがよいはなかんだ紙を火鉢てあぶれば若取落たリヤとふするぞ取かへしのなるものかいヤイと云様なしわん坊親父常に家内の雑用のいらぬこと計を思ふ折節。かのしわ息子存の外近所の娘とちよ〳〵くり合欠落しけるが。少しも悔むこともなく驚くこともなく雑用のへることを昼夜よろこひける又々女房も不時に頓死しけども。これも驚かず又雑用のへる事を（10オ）悦ひ是はよいあんばいジヤ迚もの事にわしも死んだら一向雑用が入まいといふやうな古今無双のしわん坊なりしか此親子の意を見込で彼ごくだうむすこを異見して貰ひたく頼みければ

せうちして彼のら息子に向ひ又実父に勝り種々さつたの弁舌を廻し利害を解聞し倹約一方は勿論都て常になるべき程のことは洩さす云ならべて異見しければ。さしもののらどのは存の外其上に打てかへ感（10ウ）心して扨々これまでウンテンカンを後悔しなみたを流し畳に天窓を摺付ちつとも上けさりければ親父か曰合点したらわしも頼まれた甲斐が有て外聞かたしと大に悦ひわしか云事か得心さへいたればそのやうに叮嚀にせずともちと天窓をあげても大事ないといひければ」「息子　イヨ〳〵些てもあたまを上ますと異見か五体へかゝり升と云てしびりをきらしちんば引てそ帰りけると云やうな今時の若ひ衆の（11オ）了簡と思ふべし

むかしは言葉少なふして情ふかく心もやさしかりしもの也しか今の世には詞多くついしやう軽薄にしてちやらつかし人あいさつなどはむかしよりも今は行届て真実はとんとなし中昔までも詞に忝ひと云ひしに其後はお忝のふこさり升といへとも手紙に御忝奉存とはかゝすなれども今忝いとばかりいへは大平なやうに思ふ也。是も又むかし風にて止めになり当世は何てもかでも（11ウ）難有存升と云う世上一統のならひとなり。難有と云事は至て重きことにて貴人高位主人に対しても一生に一度か二度有なしの詞なりしに今ては仮初も有かたい〳〵と云事か一統のはやりことばとなりしゆへ。そこで本実の有難と云事はとんとない事にてソコテ番子に迄有難といはねはならぬか習ひとなり又其上の軽薄言葉にはお有難ふ存升とうぞおちかひ内にといはねはうつりが悪し昔の女子の（12オ）当世言葉にはヲ、しんきヲ、すかんといひしか今はヲ、イヤヲ、イヤウヲぶさいくヲ、きたなナド前編にもある通り目下なものには。どふしやこふしやと云ひしものか今はおまへどふしておくれ。こふしておくれ。とふしなされ。こふしなされ。近年は男迄。どうしい。こうしいと云。近頃ては歴々の御侍方の御とゐるをコレ助太夫玄関へ案内しておくれ下部をコレ権介草履をなをしておくれんか。先かちの太郎左衛門先をはらふて走る人をしなさらんかと云やう（12ウ）ともなけれともマア大体是に順した世上の詞つかひなり。又目下の者の蔭たて云には。旦那をおやじと云はお定けむしとも。目玉とも焔魔と云又奥様はよふ物をさしいでるゆへあまの邪鬼とも。山の神とも云又近年奥さんの異名を専ら。れこなやくがいかふ御つしやるとふおつしやると云事腰元あしえ衆の内との詞なれとも今は世間一統流行ことはとなるゆへ爰に顕し述れども奥さん方には必内々のこと也。さりとていまた迷ひの凡夫と仏も（13オ）のたまひしも理りならずや譬へは葬礼は天への恐れあれば夜るに極りしものをよき葬礼ほど昼中の八つなどゝ早ふ行ふ。婚礼は人倫の交りの大礼なれは昼の儀式に極りしものを夜分に行ふ是皆銘々勝手づくにて道に背きたることなれども世のならはせるなれは是非も及ばず。金持の所に世継の子なければアノマアかね持の所に世継の子のないといふは。扨もいじの悪ひものじやと思ふ。薄い所に子のなき所も沢山あれともアノマア（13ウ）薄い所に子の無といふはいじの悪ひも

のと思ふ人はとんとなきものにて。よいとも悪ひとも薄けれは評義はせぬもの也。又アノやうにしわんぼうの利強い悪まれもの程あつて金持じやといふ。利強いにくまれものに金もたぬ人も多けれと是も評義はせぬもの也。厚い人がよひなりすれば厚い程有て能なりすると思ふ悪ひなりすれば。あれじやによつて金かてきるといふ薄ひ人がよい形すればコレデハ始終がつまるまひと（14オ）

金のある山にかゝつて女とも知る里下着の深くほれぬる　案山子（14ウ）

異見をはたて板に水なかす弁かゝらぬやうに身用心して　松樹軒凡光（15オ）

とふ又悪い形すれば。よく〳〵じゆつなひかしてアノマアなりハイトいふ何ほとあほうな人てもれそさへあればかしかふ見える何ぼ程わるひぶ男でも逢そさへあれば足のつまさきから天窓のてへん迄よい男に見へた。譬へ薬罐あたまても其赤光な所に思ひ入れかつき鼻がいがんてあつても。其はなのいがんだ所に惚けかさしどうもかもめつた無情に可愛らしふ見へてたとへ口熱のわざにて口が臭ふても麝香のやうな匂ひ（15ウ）がして至極塩かげんかよひやうにおもふもの也是全く心のまよひと云もの也と思ふべし

昔も今も娘の子を内育にすればぼつとりとして娘らしくてよけれども。チト又世間知らねば不束也と智恵づけがてら奉公に出す親もありしに。奉公すれば大に了簡が違ふてきて。親兄弟の傍に居てはあほう口もたゝかれず奉公に出れば傍輩同士心安ければ芝居役者の噺世間の男の善悪あほう（16オ）口はいひしだい人のことはそしり次第。はたからもおだてしだい善事は覚へす。いけんこと計覚へて人馴てホンあばずれとなり男は三文とも思はぬやうになり「コレおたれどん水の中には立れるか人の中にはたゝれぬと云事も有又奉公と云ものは適には気楽なことも有けれどイヤモ大体気のつゝなひものではないゾイナ傍輩はナ皆うは皮はうつくしい顔して付合ふて居ても心の内ではみなしらじらソウ〳〵と考へてゐるものが多ひワイナ（16ウ）夫をまた気にかけてゐてはつとまるものじやナイ壱文ても思はずに居るやならぬじゆつなひ中ても些づゝ楽んたりあだ口でも叩てしのがんならぬホンニコレ」「ヲスキ　おたれどんおまへ嫁入してならかならず姑のある所へなと行なへこなたの隠居さんてしれてあるほんに譬への通り。仏壇と年寄とは置所かないとはやういふたものジヤ人をつかわねば損のやうにする也。尻の重い癖に口やかましく役にもたゝぬことには細かふよふ気かつくし（17オ）食物は水くさいの辛いのイヤ歯に合ぬわの舌に合んわの。こんな強い飯を喰と跡で水呑て尻あぶらにやならんわのと古言八百やをやのばゞかはだして逃るくらいなものじやシテ夏は一番にあつがるくせに冬になると一番に寒むかるし体は皺だらけて祖父はきたなしばゝはむさくるしイヤモ見な〳〵から気かしゆんで気色が悪ふなるシテモいぢのわるひ夜中にいつしく咳はらひて邪魔したり。行燈の火かき立に起たり（17ウ）

今はマア奉公の間だジヤによつてかまはんが嫁入した当座やなんとなり。いんちくさはぎと云ものジヤ盗人の昼寐と隠居さんの腰もめはあてがあつてナわたしやいやで〳〵ならぬわいナおたれ「アノけゝで若い人はそないにないがナ今の年寄は顔の皮か厚ふてナてんでといふと皆年寄ジヤセ」　おすき「イヤモ年寄と人かいやがつて相手にせぬゆへ気がひがんでナイヤマタおやぢはいけんなからもあつさりとしてゐるが婆々はどふもかふもならん（18オ）世間体で後生はよふ願ふが根性はゐらふ悪し。仮そめにもチトしたことを口やかましう云てしかりこかし。ゐぐりわるひいやみ云たり。おいかけ云てこまらしくさるしイヤモウ只の一つも取所のなひしろものジヤと云て隠居さした所かやつはり折々本家へ出て来てさしいこさい云てかきまはわさずには置ぬ。イヤモ勘当もならず義絶もしられず。世間体かあつてとふもほり出されもしられず。チト弱けれは先の短い楽しみもあれども。きはめていちの（18ウ）わるふ達者なものじやイヤモウ年寄はきついやつかいもので困り入たものじやソヘ」　おたれ「それでも又かけ向ひの所はナ気楽てよいがどふて宿這入やとの笹世帯はナいもじや褌のつき切さへ不自由ナハへ又ぢゝばゝの有所はこまつた物じやが家か古ひたけてとふて汁けかあるし。男がよければ御内證かしかないし内證あたゝかいと男かわるふてくひにくし。扨も〳〵世界のことは二つよひことはなひホンニそれに付て一首うかんだ（19オ）

三度たく飯さへこわしやはらかしおもふままにはならぬ世の中

なんとよかろがなホンニ先度もさる殿達のいひジヤことには丁稚と女房はよそのかまひ。ふとんと雪隠は内のがよいと云てジヤツタワイナ尤なことじやゾヱしかし女子は女子の情を失ふては男にあいそつかさるゝ其心得の歌にナ

たくなみは空うそげつぷのひあくびせきすゝりはなおなら

くつさみ（19ウ）

この歌さへ守てゐて居て其外にどのやうなことで何べん戻つても恥にはならぬ。どうて一軒や二軒や三軒では納るものじやないに何十軒も往内にはどこぞではよい所へ行当るものじやソヘおすみとんマア嫁入せぬ先にどれそふな男を目利して引かけておさんか。嫁入のたしの用意にナア」　おたれ「わしもつく〳〵思ふにしるけのない男に掛つては利屈か悪ひと思ふたゆへまだ何の角のと云て番頭はばんとうたけの事あらふ（20オ）

ちやう〳〵といふてあかぬはせにはこの継にかけても伴頭の腰

南星楼杖英

くひ過し朝はん頭はめしたきの胸につかへたうら腹ふくれ

亀遊（21ウ）

女とちあちらこちらと迷ふ気に男の穴をさかし社すれ

菊郷（22オ）

と思ふてかゝつたらナ最五つ月になるゆへせりふきく所か聞イナ番頭の云事には此ことは両方よしのこと五部〳〵のせりふジヤによつてとんと出さぬ気でぬらりくらり云て逃廻るによつ

て。ごくかわいて〳〵ならぬ。よつて生きてはゐんとおどしかけてつよふいた所がそんなら是悲がなひと云て。取揚婆の祝義たけは思ひ切て張込ふとぬかしくさつてごうがわいて〳〵いやもあいそもこそも尽はてたワイナ番頭は直打かあらふ（22ウ）と思ふてゐたか大きな壺をかふつたワイナ夫はそふじやとふて宿這入前迄勤る番頭のことなれは金けい鳥てはなさずじやワイナ」　おすき「ヲヽふさいく。私も恥をいはねは利が聞へぬか去る所の帳合役は筆先の工合がよかろうと思ふてかゝつたりヤナ漸々間にびんつけ歯や白粉一色位てナゑらふ張込だ所がやう〳〵まへだれ一つくらいてとんと燈明の火でおいとあぶるやうな物で埒が明ぬしたがよふ思へば帳合役は大事のことじやな（23オ）よつて金の出入は旦那がして帳合役にはねぶらさぬゆへ。却てとんと銭がまはらぬものゆへそこでやう〳〵店の小銭を些つゝわらんじはく計のことでとんとかいしよかなひワイナ」　おすき「イヱ〳〵それでも其方が細ふ長ふ長久するぞへわづかな事ても霧が積つて山となるで。日々のことは。大体大きなものじやなひぞへ。又さく〳〵よふ切れはなれのある若い人は其時はよひ替りに足の上るもはやいイヤモ親方の手離れてからと（23ウ）云ものは三文の直打もあるものじやなひゾイナじやによつてほんのいつくわのせりふとにらんたらこふばいはやふ取入ぬことは不定ジヤ何時おいどに抱わらふもしれぬぞへこんどから番頭や帳合役にかゝりナへ大に大壺かぶるものじやぞへ。二番頭か三番目の風呂敷手合の外を家にして商ひにかけ廻る代呂物てなけれは汁気がないゾイナそしてマアこつらにくいにぎりこのめつ永大根と云番頭のせりふも。江戸なまり（24オ）するやうなはち巻手合を頼んて台所や店先て大声あげてせりふをしていやからして貫ふたらまつさら物にならんこともなひけれど。其ゐんだ顔役にやつはり夫相応の物入かあればほんのとぎ賃に身流すやうなものジヤによつて夫よりは幸旦那の赤やにかづけて仕舞がかしこのばん付じやソヱ　おたれそれでも十月に極まつてあるものジヤもの　おまきアノマア遅ひこといゝじや。月たらずも月餘りもあるものジヤわい（24ウ）ナ」おたれほんにそふじやと思ひ旦那にかゝり馴染重りし上　旦那「おたれに向ひ何とわがみわしか可愛か憎ひか」と向ひければおたれ扨はおいでたななんほ肩からでも旦那は旦那だけのことて糸錦の帯の一筋くらひはおんそろりい。してやつたりと思ひアノマアあなた様か何の憎ふござりませふモフ〳〵可愛て〳〵とふもこふもなりませぬ　旦それは真実かや　おたれ真実も〳〵真実しんて可愛てなりませぬ　旦夫ほどわし可あひ（25オ）けれは何云も勘定づくジヤ何と半季の給銀ありかた負てたもらぬかといひし也扨も〳〵両方か〳〵で今は商ひのしにくふて口銭を取さぬ筈じや此節うつかりしたら大体かけ損かあることじやない。とちらこちらもぬかるものジヤなひ始は母親が娘を智恵つけに出さるゝ程あつて古今無類の上智恵か付と思ふへし穴賢〳〵

当世医者風流解下の終（25ウ）

当世医者風流解の引ことにも世の人々の腹わたを探り尻をまくり臍が茶をわかすやら飯たくやら酒のかんして一ぱいのむやうだんだ舞へおもしろおかしさこともあれども此二編にはあらはし尽くしかたくされば極々味ひ所の酒肴を以て酒飯茶らくりの三段目の切本正根場は三篇へ廻し著述せしむるものならん　横谷南海述（26オ）

文政五年午正月　作者　横谷南海

京師書肆　河南喜兵衛　美濃屋平兵衛　山田屋五兵衛　大坂書肆　河内屋茂兵衛（26ウ）

前号の訂正

「三重大学日本語学文学」26号に掲載した翻刻『当世医者風流解』初編の正誤訂正を次に載せる。ご指摘の明治大学文学部助手ショーン・ニコルソン氏には厚く御礼申し上げる。

十四頁上段十一行目（4ウ）「御医者さんより」→「御医者さんより」。

十八頁下段二行目（20オ）「出来ぬやうに」→「出来ぬように」。

二十八頁下段一行目（1オ）「癒すには」→「癒すには」。

三十頁下段十行目（9オ）「暫くのこと」→「暫らくのこと」。

三十二頁上段十四行目（15オ）「一枚敷」→「一枚敷」。

三十二頁下段十八行目（18オ）「娘の病人」→「娘の病人」。

三十四頁上段三行目（22オ）「掟」→「掟」。

［よしまる　かつや　本学教員］